

透析医のひとりごと

「透析開業医として思うこと」 柏井利彦

私は20数年病院勤めをした後、小さなクリニックを開業しました。同じ透析医療に携わってはいるものの勤務医と開業医との違いは大きく、立場が違えば同じことが起こっても対応がかなり異なってくることを実感しています。朝透析室に入ると病院では患者さんがすでにベッドに横たわっており、どんな交通機関を利用して通院しているのか、どんな歩き方をしているのか、身長は、などはあまり気にならず、穿刺を済ませると型どおり回診して透析室を離れ、特別状態の変化がなければどんな姿で帰宅しているのかあまり気にもなりません。しかし開業し患者さんより早く透析室に入る生活に変わると、来院から帰宅までにかかわることとなります。和歌山県は温暖の地ではありますが冬には山間部では雪の積もることも多く、自家用車にて通院されている方が、あるとき約10cmもの雪を屋根に積んだ車で来院され、「わーすごいなあ。大変ですねー」でそのときは終わってしまったのですが、その後残念ながらその患者さんは亡くなってしまいました。透析期間は27年でした。開業してから不幸にして患者さんが亡くなるとできるだけお通夜かお葬式には出席させていただくように努めていますが、この患者さんの時も夕方おまいりさせていただきました。その方の自宅には車がやっと通れる山道を約1時間かけてたどり着きました。この患者さんは透析導入当初は外シャントで再三閉塞し、早朝4時、5時に病院から呼び出され、血栓除去をし、やっと家に戻るとまた詰まったとの連絡でまた病院に呼び戻されることも再三で、内シャントに変更するまでは悩まされ続けました。しかし患者さんにとってはもっと大変なことだったとやっと実感できました。慣れとはいえ20数年も通院してこられたことに頭が下がる思いでした。

開業当初は病院勤めの習慣が抜け切れず、医療機関への通院手段は患者さん側が用意するものだと思っていましたが、車の運転ができない方も多くなりました。JRの駅まで送迎することにしても、1時間に1本しかない電車ではすこし時間的に無理な方が続出し、電車の時間に合わせて透析時間を考えなければならなくなり、経済的な余裕もできたことから自宅までの送迎としました。患者さんが多くなると穿刺の順番も厄介な問題となります。現在のクリニックでは送迎を行っていますが、それでも遠方の方は朝6時に家を出られる方もいます。以前の病院では穿刺の順番とりのため開始の2時間も前に来る方もおりました。後から来る友達の分も名前を書く人もいましたので、患者さん同士でのトラブルも絶えませんでした。

クリニックのオーナーとして透析医療だけではなくいろいろな問題を自分の采配でできることは病院勤めとは違ったやりがいのあることです。しかし、最近年をとってくると、1人で切り回しているため日曜日以外は休日がなく、遠くに嫁いでいる娘や孫のところにいくのもままなりません。やりがいがあっても自分の

時間が少ない透析のクリニックを、今後いかに次の医師に引き継いで、この地の透析医療に対する責任が果たせるかが問題だと思っています。

柏井内科クリニック

